‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

29号 1991.4.14
文・編集・発行
恋怪子

LIVE: THE STREET BEATS 1991.3.22 川崎チッタ

ØKI (vo&g)

SEIZI (vo&g)

ICHIKAWA (b&vo)

1曲目の「STANDING STANDING」をきいていて、あ、これ去年の11月22日にパワーステーションできいたって気がついた。歌詞をきいてやっとそれに気がついた。それくらいあの時とちがってきこえた。この時はじめてきいたといってもいいくらいちがってきこえた。この日の「STANDING STANDING」はバリバリバリッとしていてすごくパワフル。つぎの「マニフェスト」もそう。21号(1990.12.17発行)に「サナギがスゴイ何かになることが信じられる」と書いたことは、やっぱり信じられることだった。はじめの2曲でそう思った。そして、そういうふうに変化したØKIに心の中で「やったね!」

それから5月21日に出るというアルバム「STANDING STANDING」の中からといって新しい曲をいくつかやった。「毒の川を泳いで」、「BLACK MARKET GANG」、「明日のない迷子たち」など。サナギが完全にすごい何かになったことを、ここで確信した。ØKIもそうだけど、SEIZIもそう。正式メンバーになったというベースのICHIKAWAもパワフルでカッコいい。ドラムもしっかり土台になっている。ØKIがすごい何かになったと同時にTHE STREET BEATSというバンドもすごい何かになった。以前感じていたようにØKIがバンドを統率しているんじゃなくて、4人がひとつになっている。演奏と歌をききながら「カッコイイ!」と何回も声に出していった。

それから今まで何回もきいたことのある「NAKED HEART」「MEET THE BEATS」、「GO AHEAD」、「BEATNIK ROCKER」、「ヒロシマ」「BOYS BE A HERO」など。一気にかけあがり、かけぬけていく演奏と歌。すごい! すごい! これで生きていくことをすこししのいでいけそうだ、次のライブを楽しみにすることで。そう感じた。

アンコールの「約束できない」でライブがおわった。

すごい何かになったØKIに拍手! ØKIを信じた私に乾杯!

SPECIAL THANKS TO: 斉藤浩司
あなたがTHE MODSの「PROUD ONES」のテープを送ってくれたのでこの号をまとめることができました。

THE MODSの「PROUD ONES」のこと、THE STREET BEATSの「世界—悲しい街」のこと、THE MODERN TIMESのライブのこと

THE MODSの「PROUD ONES」をきいて、THE MODSってTHE STREET BEATSみたいって感じた。こういったら「それ反対だよ、THE STREET BEATSがTHE MODSみたいっていうんだよ」と笑われるかもしれない。でも私にはそう感じられる。2曲目の「LIVING DEAD」と4曲目の「LONDON NITE」が特に。私は、なりゆきまかせのいきあたりばったりでバンドに出会っていて、いわゆる体系、いわゆる歴史、そういったものをなんにも知らない。だから「…みたい」といってもその「…」が音楽的な意味でオリジナルなものであるということではなくて、そんなことは私にはどうでもいいことで「…」とはバンドに出会ったときに「こういうの、はじめて(オリジナル)」と感じたということなのである。THE MODSの「PROUD ONES」には、その「はじめて(オリジナル)」という感じがない。8曲目の「GUNSLINGER ROCK」と、森山達也じゃなくて他のメンバーが歌っている9曲目の「BACK TO ALLEY」はすこしその「はじめて」を感じたけど。

どうしてTHE MODSをTHE STREET BEATSみたいって感じるのだろうと思って、THE STREET BEATSの「NAKED HEART」をきいてみた。

やっぱり…。「NAKED HEART」は強く心にひびいてくる。

THE MODSの森山達也はPROUD ONES」ではTHE STREET BEATSのØKIが「NAKED HEART」で立っていた心ぎりぎりのところには立っていないのだ。自分の心を自分のことばで歌っていないのだ。だからこちらにとどいてこないのだ。「システムの鎖をひきずりながら、閉ざされた壁がいま砕かれ、さらされた階級社会の罪が、広場には憎しみMARCHING ON」、「自由のため流された血と涙、逃げまどう市民 絶望の声」(「TIME」から)、「東で糸ひくCIA、陰で邪魔するKGB」、「からみあった時代 しかけられたニュース、うそとほんとが見えにくくなる、あやつられたマスコミニュケーション」(「FRIENDOR FOE」から)といった歌詞が大げさなだけにきこえてしまう。全部借りものにきこえてしまう。それはそういういわゆる大きなことを自分の心の奥底までひきよせないまま歌っているからだ。

「PROUD ONES」を何回もきいて、こんなことを考えていたときTHE MODERN TIMESのライブをきいた(3/30 浦和ナルシス)。1曲目の「雑新」で「えっ、」っと思った。1月18日にナルシスできいたTHE MODERN TIMESと全くちがう。あのときは「自分のことばで、自分の心で歌わなくちゃだめだよ」と24号(1991.2.13発行)に書いたように、森山達也に対するのと同じ反発がおこったのに、この日は1曲目から心にとどいてきた。このあいだと同じく「動乱」、「戦闘開始」という歌もやった。すごく説得力がある。あのときは「動乱」とか「戦闘開始」とかの歌詞がみんな借りもので、テレビかラジオからきこえてくることばと同じで空々しく感じたのにこの日はそうじゃなかった。THE MODSの「PROUD ONES」にもいえるこういう強い歌詞(ことば)にはどうしても歌う人が負けてしまいがちになる。歌詞(ことば)の強さに乗っかってしまいがちになる。この日のTHE MODERN TIMESのヴォーカルの人はそういう強い歌詞(ことば)と格闘して自分の歌詞(ことば)にまでしていた。そうなると強い歌詞(ことば)は真に強い力となってとどいてくる。

THE STREET BEATSのØKIが「NAKED HEART」のなかで歌っている「世界—悲しい街」もそうだ。それについては雑誌シンプジャーナル1989年10月号の下村誠のTHE STREET BEATS渋谷公会堂のライブ評「幻想をのり越えて」を読んで下村氏に出した手紙から引用します。

……(略)というように記事の後半は下村さんがTHE STREET BEATSの渋谷公会堂のライブで、心の眼で見たことが書かれているので読みごたえがあります。けれども前半の「1989年7月25日。6時半35分。渋谷公会堂には…」から「…6月4日。あの日から北京は「世界—悲しい街(まち)」になった。」までは、見当がはずれています。ØKIが「世界—悲しい街」を歌えるのは、単にØKIが広島で生まれ育ったからでもなければ、44年前の出来事がすごいからでもない。そんなことじゃない。ØKIが広島で生まれて、そこで20年以上生きているなかで、44年前におこったことから現在につづいているもの、そして、そのつづいているものから見えてくる44年前のことをいつも深く感じとっているから「世界—悲しい街」をうたえるんです。マスメディアのお世話なんかにならずに自分の裸の心(NAKED HEART)で感じとっているからなんです。そういうØKIだから、広島が「世界—悲しい街」になるんで、他の人たち、テレビや新聞などをとうして広島のことを知った人たちにとっては「世界—悲しい街」なんてことはいえない。たとえいえたとしても、それは原爆がおとされた街だから、誰にとっても「世界—悲しい街」だというくらいのことで、ØKIのうたう「世界—悲しい街」とは全くちがう。下村さんは「北京は世界—悲しい都市(まち)」になった」と書いていますが、ØKIのうたう「世界—悲しい街」とそんなに簡単に一緒にしてほしくないです。「一方的にNEWSをタレ流す」テレビで天安門の虐殺を見て、いくら「何か巨大な悪意にグサッと刺されたような気分を一週間位ひきずっていたのだ。」といったって、テレビが一方的にうつしているものを見て、それが虐殺だから強く反応させられただけのことじゃないですか。一時の気分じゃないですか。ØKIのうたう「世界—悲しい街」は決してそんな気分の表明なんかじゃない。目でじゃなくて裸の心で見えるものをうたっている。出来事が大きかったり(新聞の見出しの活字が大きいといったくらいの意味ですが)、テレビが長時間にわたってうつすと大きく反応させられ、テレビや新聞の扱いがたいしたことがなければそれなりにたいしたことなく反応させられていて、どうやって"偽装からくり"を見破るんです? 「人々はそれらの悲劇を均等にうけとめ無感情に聞き流すだけである。」とのことですが、私はそうは考えませんが、もしそうだとしても、それでいいじゃないですか。たかがマスメディアがタレ流しているニュースなんなら。あることをあるとわかり、ないことをないとわかるには、そんなマスメディアのお世話にならず、自分の眼で見ることでしょう。下村さんが引用しているようにジャックケルアックだって「目をつぶってみろ、本当の事が見えてくるぜ。」っていったんでしょう? テレビのスイッチを切って目をつぶって見えるものについて考えなければØKIとはやりあえない。テレビをとうして出来事を知るというように、一方ではマスメディアのお世話になっていながら、もう一方でマスメディアを「一方的にNEWSをタレ流す」と非難するのはおかしいですよ。大切なことは、ØKIが「世界—悲しい街」をうたえる裸の心(NAKED HEART)で、心の眼で、生きているように、私たちも、仕組まれ、おしつけられたものじゃなくて、自分の心で、自分らしく生きることだと思います。テレビでつぎつぎとうつされる悲劇とやらを見てそんなことにばかり心をつかっていたら、もしかしたら自分のすぐそばに、死にたいほど苦しんでいる人がいても、心で涙を流している人がいても、気がつかなくなってしまうんじゃないですか?

LETTER FROM: 斉藤浩司

最近少し自分に自信がなくなってきてしまって、なんかロックとかパンクとかそんなものがよくわからなくなってきてしまったんですよね。俺にとってパンクってファッションだったのか? 俺にとってロックってただ速いビートの曲が好きなだけなのか? そんな風に考えるようになってしまったんですよ。8月に考えても答えがでるわけじゃないんですけど…。よくわかんなくて。